

特集

# フレッシューズ特集： 皮膚科の薬，増えすぎ問題？ —今こそ知りたい使い分けのコツ

羅針盤

## 治療の選択肢が増えた —だから皮膚科は面白い



江川 形平

Egawa Gyohei

鹿児島大学皮膚科学教室 教授

この10年あまりで、皮膚科診療における薬物療法は大きく姿を変えました。少し前まで皮膚科で用いる治療薬は比較的シンプルで、外用ステロイドを軸に、抗ヒスタミン薬、抗菌薬、免疫抑制薬をどう組み合わせるか、重症度や部位に応じた「さじ加減」を身につけることが重要でした。治療選択肢が限られていた分、診断力と臨床経験がそのまま治療成績に反映される、ある意味で職人的な領域だったともいえます。

状況を一変させたのが、生物学的製剤の登場です。乾癬を皮切りに、アトピー性皮膚炎、蕁麻疹、掌蹠膿疱症など、これまで十分な治療が難しかった疾患に対して、病態に基づく分子標的治療が現実のものとなりました。さらにJAK (Janus kinase) 阻害薬や新規外用薬など、作用機序の異なる薬剤が次々と臨床に導入され、皮膚科医はかつてないほど多くの「武器」を手にする時代に入りました。

一方で、選択肢が増えたことは、そのまま診療が簡単になったことを意味しません。高い有効性と引

き換えに、薬価の高さ、長期安全性の評価、感染症や悪性腫瘍リスクへの配慮、さらには保険診療や医療費全体とのバランスといった、従来あまり意識せずに済んでいた課題にも向き合う必要が生じています。薬を使うという行為は、患者個人だけでなく、社会全体の医療のなかでの位置づけを考えることでもあります。

こうした時代に求められるのは、「新しい薬＝最良の治療」と短絡的に考えない姿勢です。新薬の価値は否定されるものではありませんが、従来から使われてきた治療が不要になったわけではありません。それぞれの薬剤の強みと限界を理解し、患者さんの病態、年齢、生活背景、価値観を踏まえて最適解を探る——この思考プロセスこそが、これからの皮膚科医の専門性だといえます。新しく皮膚科の研修を始めたフレッシューズの先生方は、治療薬の種類が多さに戸惑いを覚えるかもしれません。ただ、それは皮膚科診療が複雑になったというより、選び、考える余地が広がった結果でもあります。試行錯誤を重ねながら最適解を探る過程そのものが、診療の醍醐味につながる場面も少なくありません。

本特集では、第一線でご活躍のエキスパートの先生方に、多岐にわたる治療薬を網羅的に並べるのではなく、実際の診療の流れのなかでどのような視点で選択しているのかをご執筆いただきました。皮膚科の治療薬は今後も増え続けていくでしょう。本特集が治療選択の一つの指標となり、日常診療のなかで治療について考える時間を楽しめるようになる足がかりとなれば幸いです。